

妊娠時の母児相互作用に関する研究

○室 岡 一 (日本医科大学産婦人科)
若麻績 佳 樹 (")
永 井 進 (")

緒 言

妊娠時に母親の行動が児にどのように影響するかは知られざる所であり、児の神経系の未熟、子宮壁の防禦による児への刺激微弱などから、母児相互の作用はほとんどないと考えるのが普通であろう。しかし妊娠末期では妊婦は大きな音に胎動を感じることはよく知られており、また筆者は子宮内音を新生児にきかせて鎮静作用を見出し、ここに妊娠末期の胎児では既に五感が働き、母児相互作用の可能性が考えられる。果たしてこの時期のものに意義があるか検討は極めて至難であり、あるいは期待できるような成績は得られないかも知れないが、母の性格、行動面から研究を試みた次第である。

研究 方法

正常妊娠経過をとる妊婦216例と妊娠中毒症や合併症妊娠などでSFDを出生した妊婦19例を選んだ。正常妊婦群では高音、雑音の多い水音を妊娠5月以後出産まで1日おき子宮内に伝達される妊婦水泳117例と、母の行動を特徴づける谷田部・ギルフォード性格検査を実施した70例を選び、それぞれの児についてアンケート質問、Brazelton's neonatal behavioral assessment scaleによる行動発達を調査し、母児相互にどのような特色があるかを求めた。

研究 成績

妊娠29~42週の妊婦237例について、腹壁に振動板を密着し、500Hzの振動音90phonを6秒間ならすと、その直後から胎児心拍数が20心拍以上増加する。この反応は妊娠経過と共に反応陽性例が増加し、妊娠8月で50%、9月で80%、10月で100%近く反応を示してくる。すなわち妊娠末期の胎児は外界音に聴性驚愕反応を示すと考えられ、延髄下の交感神経の働きは充分に

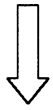
認められる。さらにまた妊娠末期の子宮腔内に挿入した小型マイク(20~700Hzで±0.5dB誤差範囲の平坦特性)で子宮内音環境を録音すると、子宮に隣接する大動脈血流量音は $63.3 \pm 25.7 \mu\text{bar}$ 、母の普通の音声伝搬音 $16.1 \pm 4.1 \mu\text{bar}$ 、母体外20cmの所で50~60phonのWarble toneは $22 \sim 26 \mu\text{bar}$ で、これらの時間波形記録でも血流量音に混じて母の音声波形、Warble toneが認められた。母の音声がかさらに強度であったり、外来音が大きければこれらの値はさらに大きくなり、胎児は驚愕反応を示すであろう。子宮内外音圧比を求めると、4~6dB/octの高域減衰であるが、300Hz以下の低音はそのまま母体腹壁、子宮壁を減衰しないで通過する。他方子宮内血流量音を泣いている状態の新生児にきかせると、そのほとんどが泣きやみ、音の方向に眼を向ける。子宮内血流量と同じ周波数帯域の人工音では、この鎮静作用はさらに低下し、5000Hz以上の高音成分が入る音では静かな状態の児でも泣き出す。すなわち新生児は子宮内音環境がインプリントされているように考えられ、子宮内の音か否かを識別できるようである。そこで、妊娠5月から出産直前まで水泳し、高音、雑音の水音を常時子宮内に伝達した117例について、その児が物音に敏感かどうか調べると、対照群に比し、就眠中は顔をしかめたり目覚めるものは少なく、また夜泣きの例も少なかった。繰り返して子宮内に伝達された高雑音には慣れの現象があるようにも思われる。次に妊娠時、容易に怒りやすい母、口数の多い母は性格に起因するものであり、また行動の変化も性格によるので、母の性格を谷田部・ギルフォード性格検査で調べ、それぞれの児の行動発達と密接な関係がないか検討した。興味あることにBrazelton's scaleのDimension 1(interactive processes)の分野で母児間に性格特徴の関係が多くみられ、児はanimateの刺激にはよく反

応を示すが、inanimate の刺激には特異的でない。これは前述の子宮内音に特異的によく鎮静作用を示すのと共通点がある。このように母の性格が児のヒトに対する反応、すなわち性格形成に関与することを示唆するものかもしれない。今回の調査では偶然にも母の性格と児の行動特性に同義的なものが多く、口に手を当て自ら慰める児の母に抑うつ性性格が多く、Alertness の著明な児の母に神経質が多く、刺激による反応が減弱しない児の母に活動的、社会外向性格が多く、驚きやすい児の母に劣等感が強く、外的刺激に対して警戒、防禦という適応の類似性が示された。妊婦水泳173例の児は赤ちゃん水泳が、対照の非妊婦水

泳69例の児に比べ容易に実施される傾向を認めしたが、これは母が水に対し積極的に、安心感、楽しみを示すため、児も又リラックスできることに起因することが解った。このように出生前の母児相互作用で児はanimate の刺激、とりわけ母からの情報が識別できるようになり、出生後はしたがって母の行動をよく観察し、それに従っての行動発達がすすみ、性格形成がなされてゆくように思われる。出生前後の母児相互作用は未だ明らかでない点が多いが、人生の出発点であるだけにその意義は大きい。今後さらに科学的に検討を進めてゆきたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



緒言

妊娠時に母親の行動が児にどのように影響するかは知られざる所であり,児の神経系の未熟子宮壁の防禦による児への刺激微弱などから,母児相互の作用はほとんどないと考えるのが普通であろう。しかし妊娠末期では妊婦は大きな音に胎動を感じることはよく知られており,また筆者は子宮内音を新生児にきかせて鎮静作用を見出し,ここに妊娠末期の胎児では既に五感が働き,母児相互作用の可能性が考えられる。果たしてこの時期のものに意義があるか検討は極めて至難であり,あるいは期待できるような成績は得られないかも知れないが,母の性格,行動面から研究を試みた次第である。